『新青森市史　資料編4　近世（2）』

川名　禎

『新青森市史』と名付けられた本書に登場する人々は、近世初期より新天地に夢を求めて移り住み、幾多の困難を経て現在の青森市の基礎を作った人達である。本書は、そうした住民の姿を生き生きと映し出している。既刊の『新青森市史　資料編3近世（1）』が、港湾都市としての青森成立から発展を扱っているのに対し、本書は近世青森町の持つ都市としての性格や機能、住民生活に関わる史料を収録している。従前の旧『市史』資料編では、日記などの編年史料を中心に構成されていたが、本書では近世の青森が持つ問題点をテーマごとにまとめて、数多くの史料を収めている。このように両者が異なる手法を取っていることにより、青森を研究する者にとって重厚な糧を得たわけであり、そうした点からも本書の持つ意義は非常に大きいといえる。以下各章の構成を示す。

第一章　外浜から青森町へ
　第一節　青森町の成立
　第二節　青森御蔵と蔵米の動向
　第三節　町普請
第二章　青森町の支配と町方
　第一節　青森勤番の職掌
　第二節　青森漁船勤番
　第三節　青森町の支配

第四節　文久四年御用留書

第三章　青森町人の生活と生業

第一節　問屋組織

第二節　諸職

第三節　生活の諸相

第四節　青森騒動

第四章　人と物の出入

第一節　幕府巡見使

第二節　取締

第三節　紀行文

第四節　道程

第五節　陸上交通

第五章　災害

第一節　火災

第二節　地震

第三節　洪水

第六章　幕末の青森

第一節　開港と青森町

第二節　幕末・維新期の青森

各章の冒頭には丁寧な解説が添えられており、表などを駆使したその内容からは、既に優れた通史編の刊行を予見させるものである。本書を構成する各テーマの設定や史料の配分には、恐らく相当の苦労がなされたことと拝察される。筆者にとっては意外に感じる部分もあるが、史料の割り振りは十分に熟慮された結果であり、決してそれらを形式的な区分にとどめない編者の編集姿勢が窺われる。以下、各章の内容を簡単に紹介して印象を述べてみたい。

第一章は、近世初期に弘前城下の外港として新設された青森町の成立と、その主要機能を担った青森御蔵、さらに諸施設の普請に関わる史料で構成されている。青森町の成立では、新しい港湾都市を開設するにあたっての各種の優遇策及び繁栄策が藩によってなされたことが理解され、政治的理由で新設された都市に共通した性格を見て取ることができる。

都市の性格を特徴付ける青森御蔵と蔵米の動向については、蔵米の出納や青森御蔵の機能を把握する様々な史料を掲載しており、全体としても比重が高い。そして都市の建設という点からここに町普請に関する史料が収められるが、橋や堂社の修復といったものが目立つ。その中で町奉行所の新規取立て（史料番号以下略二七）や道路の拡幅に関する史料（二六）は、都市の発達過程を考える上で興味深い。

第二章は、青森勤番の職掌に関わる史料を中心に、町方の概況を示す史料及び藩による公的な御用留によって構成されている。勤番士の具体的な職務を記した「青森在番の勤書」（三三）からは、青森町の治安や世情、町奉行の職務にまで幅広く注意を払う勤番士の性格を見て取ることができる。後半部分には具体的な職務の実例が示されており、公用日記として読むことも可能である。

第三節の青森町の支配では、町方の町入用負担の実状と幕末における青森町の人口及び職業構成が「人別戸数調方覚」（三七）などによって示される。こうした基本情報には青森町の概要として独立した章を設け

て頂きたかったが、恐らく該当史料の点数がそれをさせなかったものと解される。解説には次章の諸職に先立って職業一覧の表が掲載されている。

「文久四年御用留書」（三八）は、青森町を知る直接的な史料ではないが、「藩庁日記」の原典と考えられその資料的価値は極めて高い。

第三章は、住民生活の諸相をあらわす商業活動や事件などの史料を中心に構成されている。第一節では青森町の経済基盤を支えた問屋組織について、第二節ではその他の諸職についての史料を掲載し、第三節では、青森町に起こった様々な日常の出来事を、日記史料などから知ることができる。惣名主の願書（六八、六九）は、青森町の好不況の推移が青森を取り巻く周辺環境の変化によってもたらされたことを窺わせる史料である。常灯の再建、夜間の出帆などそれらに対応すべく起こった港湾機能の変化は、住民の生活リズムにも影響したことは想像に難くない。

第四節の青森騒動は、収集された多くの史料を事件の経過に沿って配列し、事件の実態に迫るものである。その過程において弘前藩の宝暦改革とのかかわりが浮上してきたことが解説に述べられており、最新の研究成果を踏まえた新知見が通史編で明らかにされる筈である。従来、民衆の立場からの評価が趨勢であったこのテーマが多様な広がりを見せようとしている。そうしたなかで、世界の限られた食料資源を大量に買い集めている現在の日本の立場についても考えるきっかけになればと思う。

第四章は、主に交通に関わる史料を中心に構成されているが、史料の内容は多岐に及ぶ。とりわけ幕府巡見使の史料からは交通のみならず地誌を含む多様な情報が導き出されるが、巡見使への問答をマニュアル化した想定問答例（一一二）は藩の公式な見解を示していて興味深い。また、青森に関する紀行文からは、船方の見解と実態との矛盾を指摘する「東奥沿海日誌」（一五六）など、町の実態的側面を知ることができる。

道程に関する史料を集めた第四節は、道帳をはじめとする青森周辺の交通路がわかる史料を載せるが、道程以外の視点からみても重要な史料が多い。つぎの陸上交通では、四国金毘羅にまで足を運ぶ大旅行を綴った道中日記が興味を引く。

第五章は、史料的に被災の状況が復元しうる九回の災害（火災、震災、洪水）に限定し、それらの関連史料で構成されている点が特徴的である。紙幅の都合上この地域に深刻な被害をもたらす「ヤマセ」による冷害が扱われなかったのは残念であるが、通史編において触れる旨の説明がなされている。ここでの史料解説にみられる詳細な叙述は、史料を読む上で非常に参考になっており、この章の価値を大いに高めているといえる。

第六章は、幕末・維新期における青森町の動向を示す史料を二節に分けて掲載している。第一節では滝屋文書のうち旧『市史』資料編未収録の史料を中心に構成しており、当該期における御用達商人の性格や幕末の人口及び職業などの情報が示される。第二節は、軍事的緊張のもとで変革しつつある明治初頭における青森町の状況が窺われる。

次に付図として収録された「青森町絵図」について見てみたい。本書は冒頭カラー頁や本文中に多くの絵図及びトレース図を載せており、編者の絵図に対する高い関心が窺われるが、とりわけ写真の質が良好であること、文字の判読を可能にするため二枚に分けていること、裏面にトレース図を載せていること、箱に景観年代から推定された作成年（貞享

から元禄初年）が記されていることなど、本編史料のみならず絵図に対しても十分活用できるような配慮がなされている。

「青森町絵図」の内容について見てみると、絵図は青森町を中心にその境界域までを描いたもので、周辺には「百姓町」の注記もみられる。絵図の記載内容は豊富で多様な主題が考えられるが、町の長さを記した注記がひときわ目を引く。しかし、それらは土地利用表記（「田」の文字）にかかって記されることなどから後筆の可能性も考慮される。絵図の縮尺は凡そ三千分一程度で、現在の都市計画図に匹敵することから公用図として使用されたものであろう。本絵図から青森町の都市プランを概観すると、「上中下」の町名が示すように善知鳥神社を中心に西方向へ「タテマチ型」を形成しており、用水もこれに沿う形で流れる。東西の対立軸を設けて見た場合、主要機能の集中する東側の町と、新規取立による西側の町に分けられ、後者は場末的要素を持ち、水害の影響も受ける。

以上のように、本書は豊富な史料と優れた見識のもとにまとめられた良書であり、これをもとに多くの研究が生まれることと思われる。使用にあたっては、年代別の細目次があればさらに有難かったが、できる限り多くの史料を掲載したいとする編集意図の表れか、全く無駄のない構成になっている点はむしろ喜ぶべきであろう。

恐らく、この後数百年の供用に資すると思われる本書の刊行を喜ぶと共に、関係者の方々のご苦労に心から敬意を表したい。

（A5判、七九一頁、青森市、平成十六年十二月刊、五七〇〇円）

（かわな・ただし　國學院大學非常勤講師）